

# 去年の木

新美南吉

青空文庫



いっぽんの木と、いちわの小鳥とはたいへんなかよしでした。

小鳥はいちんちその木の枝で歌をうたい、木はいちんちじゅう小鳥の歌をきいていました。

けれど寒い冬がちかづいてきたので、小鳥は木からわかれてゆかねばなりませんでした。

「さよなら。また来年きて、歌をきかせてください。」  
と木はいいました。

「え。それまで待っててね。」  
と、小鳥はいつて、南の方へとんでゆきました。

春がめぐってきました。野や森から、雪がきえていきました。

小鳥は、なかよしの去年きよねんの木のところへまたかえっていきま  
した。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませ  
んでした。根っこだけがのこっていました。

「ここに立ってた木は、どこへいったの。」

と小鳥は根っこにききました。

根っこは、

「きこりが斧おのでうちたおして、谷のほうへもっていつちやつたよ

。」

といました。

小鳥は谷のほうへとんでいきました。

谷の底そこには大きな工場があつて、木をきる音が、びんびん、  
としていました。

小鳥は工場の門の上にとまって、

「門さん、わたしのなかよしの木は、どうなつたか知りませんか  
」。

とききました。

門は、

「木なら、工場の中でこまかくきりきざまれて、マッチになつて  
あつちの村へ売られていったよ。」  
といいました。

小鳥は村のほうへとんでいきました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、

「もしもし、マッチをござんじありませんか。」  
とききました。

すると女の子は、

「マッチはもえてしまいました。けれどマッチのともした火が、  
まだこのランプにともっています。」  
といました。

小鳥は、ランプの火をじつとみつめておりました。

それから、きよねん去年の歌をうたつて火にきかせてやりました。火  
はゆらゆらとゆらめいて、ここからよろこんでいるようにみえ

ました。

歌をうたつてしまうと、小鳥はまたじつとランプの火をみていました。それから、どこかへとんでいってしまいました。



# 青空文庫情報

底本：「ごんぎつね 新美南吉童話作品集」てのり文庫、大日本図書

1988（昭和63）年7月8日第1刷発行

底本の親本：「校定 新美南吉全集」大日本図書

入力：めいこ

校正：鈴木厚司、もりみつじゅんじ

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 去年の木

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>